奪われた恋人

女子校生は悪徳教師に堕とされて……

天草白
挿絵／孤裡精

試し読み版

リアルドリーム文庫

Contents

目次

第1章　悪徳教師の魔の手　屈辱の強制フェラ……4
第2章　奪われた純潔　恋人が知らないうちに……55
第3章　順調な恋の陰で　淫らなセクハラマッサージ……108
第4章　深まる疑念　開発されゆく乙女の柔肌……145
第5章　恋人の目の前で　恥辱の見せつけ姦……185
第6章　捧げられた肛穴　第二の処女も恋人以外の男に……224
エピローグ　恋人たちと、悪徳教師と……277

登場人物

Characters

椎名 果歩
（しいな かほ）

華ヶ浦学園女子弓道部所属の三年生。同じ部の恋人・康平とともに全国大会を目指す。明るく活発な性格に黒髪のポニーテールが映え、Ｆカップの巨乳が目を引く美少女。

鬼頭 義明
（きとう よしあき）

弓道部顧問の四十五歳。立場を利用して何人もの女子生徒を肉欲の毒牙にかけてきた中年太りの嫌味な男性教師。

篠田 康平
（しのだ こうへい）

華ヶ浦学園男子弓道部エースの三年生。果歩とは二年生の終わり頃に告白し、恋人同士になるも、関係はキス止まり。

第1章　悪徳教師の魔の手　屈辱の強制フェラ

雑然とした体育教官室に、生々しい体液の匂いが立ちこめていた。
深々と差しこんだペニスに熱い襞が絡みつき、強烈な圧力で四方からグイグイと締めつけてくる。
結合部からは透明の愛液に混じり、ぬるりと熱い破瓜の血が流れていた。
「処女を失った気分はどうだ、藤堂？　くぉっ、さすがに締めつけ抜群だな」
鬼頭義明は正常位の体勢で貫いた女子生徒を見つめながら、賞賛の言葉を与える。
「い、いや、そんなこと……聞かないで、くださ……鬼頭先生、んんっ……！」
彼女――藤堂美佳は悲痛に顔を歪めて喘いだ。
まっすぐに伸びた艶やかな黒髪と抜けるように白い肌が鮮やかなコントラストとなってよく映える。おっとりした雰囲気の美貌は清楚そのもので、いかにも深窓の令嬢といった趣だ。
身に着けているのは、白筒袖に黒袴の弓道着だった。
白筒袖の合わせ目は大きくはだけて、丸い乳房があらわになっている。

黒袴も膝までずり下ろされて、まぶしい太ももや黒い陰りに覆われた秘所が丸見えだった。
今までに同様の手口で何人もの女子生徒を毒牙にかけてきたが、決して飽きることも、その興奮が衰えることもない。
何度味わっても極上の――男として至福の瞬間だった。
本来なら自分のような四十絡みの独身男が、これほどの美少女を抱く機会など絶対に訪れないだろう。
しかも自分は教師で相手は生徒である。
立場の上でも、結ばれることなど許されない関係だった。
そんな相手が彼の前で無防備に股を開き、大切に守ってきた純潔を差し出している。男としてこれほど征服感を満たされる光景はなかった。
「ふう、このキツさ……たまらんな。油断するとこのままイッちまいそうだぜ」
鬼頭は下卑た笑い声をもらして腰を静止させた。悲痛な表情を浮かべる美佳を見下ろし、清楚な令嬢の処女を奪った満足感に浸る。
性急にピストンを始めることはしなかった。
まずは狭苦しい秘孔に男根の形状やサイズを馴染ませるのだ。今までに両手の指に

余るだけの美少女たちのバージンを奪ってきた鬼頭にとって、それはお決まりの作法だった。
「あぐ、ぅ……くうぅぅぅ、いやぁぁぁっ……！」
だが、美佳はその言葉に答える余裕すらないらしい。
鬼頭によって純潔を奪われたばかりでは、それも無理のないことだろう。
今までにも何人もの女子生徒を毒牙にかけてきた鬼頭だが、美佳はその中でもトップクラスの美少女といえた。
深窓の令嬢然とした美貌は、いまどき珍しい大和撫子といった雰囲気だ。
そんな可憐な乙女に初めての男の証を刻み、これから肉の快楽を教えこんでいくのだと思うと、得も言われぬ征服感を鬼頭に与えてくれた。
「そら、動くぞ。男の味をじっくり堪能しろ」
言うなり、鬼頭はゆっくりと腰を前後させ始めた。
ただ犯すだけではつまらない。
自分を忌み嫌う女子生徒を官能で屈服させ、自分なしではいられない体にしてやってこそ、彼の嗜虐心は満たされる。今までにもそうやって何人もの女子生徒をモノにしてきたのだ。

ぐちゅ、ぐじゅ、と男根の抽送に合わせて、膣孔から濁った音が聞こえる。破瓜の血と体液がブレンドされた淫猥なハーモニーだった。
「ぐうっ、うぐうぅ……い、いやぁぁぁ……抜いて……ぇっ」
美佳は眉根を深く寄せ、嫌悪感をあらわに喘いだ。
「なーに、苦しいのは最初だけだ。慣れればすぐに気持ちよくなってくる」
鬼頭はにやりと笑うと、美佳の上体を抱きこんで花のような唇を奪った。
「むぐぐぐ、あふぅ」
男と手を握ったことすらない乙女にとって、これがファーストキスのはずだ。清らかな乙女の初めてを片っ端から手折っていく喜びに浸り、鬼頭は唇を重ねたまま喉を鳴らして笑った。
「ひ、ひどい、キスは、しないって……」
慌てたように顔を離した美佳が、普段のおとなしさをかなぐり捨てて抗議する。
桃色の唇から血の気が引き、柔和な美貌が怒りでこわばっていた。
「おっとそういう約束だったな。興奮して、ファーストキスまで奪っちまったか」
つぶらな瞳に大粒の涙を浮かべた令嬢に、鬼頭は愉快げな笑みを返した。
その後も決して性急なピストンはせず、丹念な抜き差しを心がける。四十五歳とい

う年齢に見合ったねちっこい責めで、初心な女体を少しずつ解してやる。
雁高の先端部を生硬な粘膜に擦りつけるようにして、スローペースの出し入れを繰り返していく。
先走りのカウパーと愛液、そして破瓜の血が混じり合い、狭い胎内で、ぐちゅ、ぐちゅ、と濁った音が鳴り響いた。
それを潤滑油代わりにして、少しずつ抽送の速度を上げていく。
丁寧な交わりの甲斐あってか、美佳は徐々に快感らしき反応を示し始めた。
「ん、ふぁぁ……あふぅぅぅ」
嫌悪感はそのままだが、瑞々しい裸身が時折びくんと痙攣する。膣孔が心地よく締まり、襞がぜん動する。
乙女の秘孔が柔らかく蕩け始めるのを、鬼頭は己の巨根を通して感じ取っていた。
とはいえ、さすがに初体験でいきなり強烈な快感を得るのは、よほどの素養がないと難しいだろう。今回はここまでだと見切りをつけ、鬼頭はフィニッシュに向けての律動に入った。
腰のピッチを一気に上げる。狭い秘孔に食い締められたペニスには、じわじわと快感が蓄積していき、爽快な射精感がボルテージを上げる。

「くくく、そろそろイキそうになってきたぞ。思いっきり中に出してやるから、ちゃんと受け止めるんだぞ」
「な、中っ……!?　だめです、それだけは……っ！」
美佳の怜悧な美貌が血の気を失った。処女だったとはいえ、さすがに膣内射精がどういった結果をもたらすかは理解しているだろう。
腰を左右によじって、胎内に埋めこまれた男根をなんとか抜こうとする。必死の抵抗ぶりが鬼頭の嗜虐性をますます刺激した。
「レギュラーになりたいんだろう？　両親の期待に応えたいよな？　くくく、少しだけ我慢すれば、それが叶うんだぞ」
鬼頭の囁きに、美佳の動きが止まる。
「わ、私、は……」
拒否しようと首を左右に振りかけ、結局はうつむいてしまう。
それを消極的な承諾の返事として受け取った鬼頭は、ラストスパートに入った。
もとより拒絶されたところで、膣外に出してやるほどお人よしではない。ただ美佳が承諾したという事実が欲しかっただけだ。
力ずくではなく、自らの意志で鬼頭の精を胎内に受け入れる――その事実があって

こそ、より深い征服となり得る。
「そうら、受け取れぇっ！　くおぉぉぉぉぉぉっ、イクぞぉぉぉッ！」
鬼頭は勝利の雄たけびとともに、美佳の膣孔にありったけの精液をぶちまけた。ドクドクドクッと激しく脈を打った肉茎から熱いザーメンが無垢な胎内にほとばしり、汚していく。
「い、いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ……！」
美佳のか細い、絶望の叫びが体育教官室いっぱいに響き渡った。
これで今年の弓道部のめぼしい女子は一年から三年まで複数毒牙にかけた。
（堕ちたな）
鬼頭は心の中で確信し、ほくそ笑む。
残る獲物はただ一人。しかも最上級の獲物である。
「次は椎名の番だ、くくく」
椎名果歩。
三年生の部員であり、女子弓道部随一の美貌と勝ち気な性格の少女だった。
そんな気の強い美少女が自分の前に敗北し、屈服し、彼の剛棒を受け入れる様を思い浮かべると、下腹を突き破らんばかりの熱い衝動が込み上げてくる。

（お前もいずれ、美佳と同じ目に遭わせてやるからな。待っていろよ）
鬼頭は邪な笑みを浮かべた。

「いよいよ団体の一次予選かぁ。がんばらないとな」
暖かな春の日差しを心地よく感じながら、篠田康平は校内の並木道を歩いていた。
人懐っこそうな純朴な容姿。すらりと均整のとれた長身は、中学のころから続けている弓道部で鍛えられたものだ。
「頼むぞ、篠田。エースのお前がしっかりしなきゃ、全国大会出場なんて無理なんだからな」
隣を歩く村瀬が、にやりと笑って康平の肩を叩いた。彼は同じクラスの友人であり、弓道部で切磋琢磨するライバルでもある。
「任せておけって」
康平は自信たっぷりにうなずいた。
実際、彼は一年生のころから県下の強豪として知られている。
もちろん、ここ華ヶ浦学園弓道部のエースだ。
この学園では三年生の夏で部活を引退するため、康平たちにとって全国優勝を狙う

のは今回のインターハイが最後のチャンスだった。
それだけに康平や村瀬の気合もひとしおだ。
二人は意気軒昂に校舎から出ると、そのまま弓道場に向かった。
「お、気合入ってるな。そういえば、椎名さんと約束したんだって？　男女の弓道部で同時優勝するとか」
「な、なんでそのことを……」
指摘され、康平は思わず頬を熱くする。
「青春って感じだな、はは。まあ頑張ろうぜ」
「よし、練習がんばるかっ」
自分に気合を入れるために短く叫ぶ。
「そうそう、果歩ちゃんにいいところ見せないとな」
「ち、違うぞ、俺は別にそそそんなこと」
「照れるな照れるな」
「だ、だ、だから照れてななな」
「思いっきりどもってるじゃねーか。リア充爆発しろ」
容赦なく突っこんでくる村瀬。

「まったく。椎名果歩といえば、男子部員全員の憧れだっていうのに……それをひとり占めなんて羨ましすぎるぞ」
「俺だって果歩と付き合えるなんて夢みたいだよ」
「堂々と惚気るなよ、まったく」
村瀬が苦笑した。
そんなやり取りの一つ一つが胸を心地よくくすぐってくれる。
あの憧れの果歩と交際しているのだという事実を、あらためて実感させてくれるのだ。
康平は村瀬と談笑しながら、足取りも軽やかに弓道場へ向かった。二人が日課としている朝の練習だ。
校舎から百メートルほど続く並木道の向こうに、立派な武道館があった。
そこには剣道や柔道と並び、弓道部用の弓道場も設置されている。
五人立ちで練習できる立派なものだ。
二十八メートルの距離を置いて設置された的に、一人の少女が弓を引いていた。
二メートルを超える弓を引き絞り、放たれた矢がまっすぐに飛んでいく。

その射姿も美しければ、艶やかな黒髪をポニーテールにした容姿もまた美しい、可憐な少女だった。
清潔感のある白筒袖に黒い胸当て。右手には保護具である押し手かけを装着し、漆黒の袴と白足袋のコントラストが艶やかな弓道着姿である。
すらりとした肢体は鍛えられて引き締まっていた。
それでいて胸元を押し上げる双丘の豊かさや肉づきのよさそうな臀部の丸みは、白筒袖や袴の上からでも見て取れる。
的を見据える真剣な表情。きりきりと弓を引き絞る動作。放たれた矢を見据え、表情を変えることなく、残心へと移った。
凛とした美しさに満ちたその所作に、康平は息をするのも忘れて見とれてしまう。
椎名果歩。
康平と同じ学年の弓道部員であり、そして今年の春から交際を始めた恋人でもあった。
「おはよう、康平。村瀬くんも」
こちらに気づいた果歩が振り返った。
「は、早いな、果歩」

ドギマギしながら康平が答えた。
「お、おは、よ……う」
その隣で、村瀬も同じようにドギマギしているのが分かった。
なんといっても、相手は弓道部随一の美少女である。会話をするだけでも緊張するのは当然だ。
それは恋人として交際し、すでに一ヶ月以上が過ぎた康平も同じだった。
「だって大会が近いもの。康平と違って、私はレギュラーになれるかどうか分からないし、がんばらないとねっ」
果歩が気合を入れて叫ぶ。
さっきまでの凛々しい練習風景も、今の少女らしい素の顔も、どちらも可憐で美しい。
見ているだけで愛おしさが込み上げてくる。
とにかく果歩の一挙手一投足がすべて輝いて見えるのは、恋しているゆえだろうか。
こんな美少女が自分の恋人だなんて、本当に夢みたいだった。
「？　どうして自分の頬をつねってるの、康平？」
「いや、夢なのかどうか確かめようと思って」

「もしかして『こんな可愛い女の子が俺の彼女だなんて夢みたいだ』なんて思った？」
「うん、思った」
「やっ……ち、ちょっと、冗談だったのに！」
真顔で応えると、果歩はたちまち真っ赤になってうろたえた。普段の勝気さはどこへやら、「あわわ……」などと照れ全開の様子だ。
そんな二人の様子を見て、友人は苦笑交じりに大仰なため息をついた。
「あーあ、二人とも爆発しろ。あと康平はもげろ」
「もげる？　何が？」
キョトンと首をかしげる果歩に、
「そりゃあ、もうアレが――」
「言わなくていいって」
下ネタに走りそうな友人を慌てて牽制する康平。
「ま、俺はお邪魔虫になりそうだから、着替えてから向こうで練習するぞ。あんまりイチャイチャしてると鬼頭ににらまれるから、ほどほどにな～」
弓道部の顧問教師の名前を挙げ、冗談っぽく笑いながら、村瀬はロッカールームに去っていった。

「もう、村瀬くんったら」
くすくすと果歩も笑っている。
凛々しい表情もいいが、屈託のない笑顔もまたいい。
それこそ村瀬に知られたらからかわれそうなことを考えながら、康平は幸せな気分に浸った。
ふと、果歩の唇に視線が行く。
ピンクに近い桜色の唇。
先日のデートの帰り道、そこに初めて触れた。康平にとっても、そして果歩にとってもファーストキスだ。
あのときの記憶を反芻し、胸が甘酸っぱく疼いた。

果歩が放った矢は的を大きく外れて落下した。
朝の練習では調子がよかったのだが、今はさっぱりだった。もともと調子の波が激しいタイプで、的中がなかなか安定しないのだ。
「はあ……こんなことじゃ駄目ね」
思わずため息をついてしまう。

部の正規の練習時間は放課後から午後六時半まで。果歩はその後も自主練習という形で居残り、一心に矢を引いていた。
八時を超えてくると、人は減り、やがて九時近くになり残っているのは彼女一人になった。
年ごろの少女が遅い時間まで一人で残って練習するのを、両親はあまりいい顔をしない。
だが果歩にとってこれが最後の大会である。
悔いが残らないよう、できる限りの練習をしておきたかった。
県によって日程が違うが、果歩の地区では五月の中旬と下旬に男女の団体一次予選が、六月の中旬に二次予選と決勝が行われる。
それを勝ち抜いた一校のみが、全国大会に出場できるという狭き門だ。
「レギュラーの発表は連休明け……」
果歩は、自分自身に言い聞かせるようにつぶやいた。
すでに残り一週間くらいしかなく、気が急く一方だった。
恋人の康平は部のエースであり、弓の調子も安定感抜群である。レギュラーは当確だろう。

だが――自分の的中率は女子部員全体の中で五番手から七番手くらい。
大会に出場するレギュラーは五人だから、果歩はその当落線上にいるのだった。
他のライバルたちとは実力の差もほとんどなく、今の調子を見て、レギュラーに入れるのか外すのかを判断されるはずだ。
もっともっと調子を上げていかなければならない。
康平との夢を叶えるために――。

康平と出会ったのは、入学してすぐのこと。
どの部活に入ろうか悩んでいた果歩は、たまたま覗いた弓道場で黙々と矢を射かけている康平を見かけたのだ。
入学早々にして、すでにエース級の実力の片鱗を発揮していた彼の射姿は、凛として美しかった。
その美しさも、一目で弓道に惹きつけられた。
最初は弓道部員としての彼に興味を持っていただけで、異性として意識してはいなかった。
だが、同学年として試合や合宿などで接しているうちに、いつしか彼を男性として

見ている自分に気がついた。
そして、それは康平も同じだったようだ。
もともと学年一の美少女として有名だった果歩に、初対面のときからずっと憧れていたのだとか。
二年生も終わりを迎えようとしていたある日、二人は最後の大会で一緒に全国大会に出場しようという夢を語り合った。
会話が盛り上がった勢いで康平が告白。果歩もそれを受け入れ、交際が始まったのだった。

そして新学期。交際して間もなく二ヶ月が経つ。
毎日、恋人と会える喜びに浸りながら、一方で果歩はレギュラーに入るための懸命の練習を重ねていた。
絶対に、康平と一緒に全国大会に出てみせる――。
しかし、そんな思いが気負いとなったのか、次に放った矢もやはり的を外れてしまう。
「どうした、調子が上がらないみたいだな」

背後から一人の中年男が歩いてきた。
振り返ると、弓道部の顧問教師を務める鬼頭義明が立っていた。
ぎょろっとした目に分厚い唇が下卑た印象を与える容貌だ。
腹が出た中年太りの体形で、いかにも不摂生といった雰囲気を醸し出している。
やに下がった目が果歩の全身を舐めるように見回した。
鬼頭としてはフォームチェックの意味合いがあるのかもしれないが、どこか淫靡に感じるその視線に、全身の肌が粟立った。
部の内外を問わず、複数の女子生徒にセクハラしているという悪い噂が絶えない男である。
仲良くしている下級生の藤堂美佳から、以前に相談を受けたこともある。
練習中にやたらと体を触ってくるとか、冗談めかしてキスまで迫られかけたとか。
そのときは果歩も怒りをあらわにして、鬼頭に詰め寄ったものだ。
彼の方は悪気はなかったらしく、誤解を招いてすまなかったと謝罪してきた。
それをもって、いちおう場は収まったのだが……。
その後も、鬼頭の態度があらたまることはなく、果歩自身も一度ならずセクハラめいた視線を受けたこともある。

だからこの中年教師に対して、いい印象がまったくなかった。
「上手く集中できなくて……どうしても雑念が入ってしまうんです」
とはいえ、相手は顧問である。邪険にするわけにもいかず、果歩はそう告げた。
人間的にはあまり好きになれない男だが、鬼頭は弓道の有段者であり、指導は的確そのものだ。
不調の原因を教わり、アドバイスをしてほしかった。
「うーん」
鬼頭はうなりながら、ふたたび粘着質な視線を果歩の全身に這わせる。
「そいつは欲求不満から来るものかもしれんぞ」
「欲求不満……ですか？」
「どうだ、俺がその欲求不満を解消してやろうか」
鬼頭が顔を近づけてきた。中年男性特有の脂ぎった体臭と口臭に、果歩はむせ返りそうになった。
半ば反射的に体を遠ざける。
「別にエロい意味で言ってるんじゃないぞ。余分なものを発散して、練習に集中できるように協力してやろうっていうんだ。顧問としてな」

ぐへへ、と笑う鬼頭の顔は下品そのものだった。
とても言葉通りの意味とは思えない。ただ単に己の欲望を満たすために、果歩に関係を迫っているとしか思えなかった。
「……自分なりに模索してみます。ご助言ありがとうございました」
それでも相手が顧問ということもあり、果歩は最低限の礼儀を保って退出した。

その翌日。
「ん、どうした果歩？　顔色が悪いぞ」
「あ、ううん。なんでもないの」
怪訝そうな康平に、果歩は慌てて首を振った。
顧問の鬼頭に関係を迫られた――などと知られるわけにはいかない。
「もしかして大会が近づいて緊張してるのか？」
「え、えっと……」
「俺たち二人の夢を叶える最後のチャンスだもんな」
康平が遠い目をして語る。
二人でともに全国大会に出場し、男女同時優勝を果たす――。

それは恋人となった果歩と康平が思い描く夢だった。
まるで漫画やドラマのような展開だが、だからこそ強烈に憧れた。おそらくそれは康平も同じだろう。
もちろん、たやすい道ではない。
そもそもエースである康平はともかく、果歩はレギュラー当落線上にいる。全国大会どころか、予選に出場できるかどうかも分からなかった。
それでも――いや、だからこそ。
（まずはレギュラーにならなきゃ。そして康平と一緒に）
同じ学校で出場できる最後の大会だ。
絶対にチャンスを逃したくなかった。
「果歩？」
「私、今日も残って練習していく。絶対にレギュラーになるから。見ていて、康平」
「ああ、お前なら大丈夫だ」
元気づけてくれる康平の言葉が、しかし果歩にはどこか重圧として感じていた。
気がつけば、果歩は連日のように居残り練習をしていた。今日も、康平はもちろん

他の部員もすべて帰宅し、弓道場には彼女だけだ。
「肩に力が入りすぎだ。ほら、もっとリラックスしろ」
言いながら、鬼頭が歩み寄ってきた。
「こんな感じで、な」
わざとらしく果歩の両肩をごつごつとした指で揉んできた。それから右手で脇腹の辺りに、左手で太ももに触れ、姿勢を矯正される。
反射的に身をこわばらせた。
いくら指導とはいえ、いくら相手が顧問とはいえ、やはり恋人でもない男性から体に触れられるのは抵抗感がある。
しかも相手はセクハラの噂が絶えない鬼頭である。
「どうした、集中しろ。リラックスと気を抜くことは別物だぞ」
「あ、はい……」
鬼頭から真面目な顔で注意を受け、果歩は抵抗感や警戒心をいったん忘れ、射に集中し直す。
あらためて意識を向ければ、どうやら自分でも気づかないうちに、フォームが崩れていたようだ。

もう一度矢を放つと、今度は狙い過たずに的に中った。
「やった……！」
思わず小さなガッツポーズが出る。
過剰に警戒してしまったが、鬼頭は弓道部の顧問として必要な指導をしてくれたに過ぎないのだ、と思い直す。
「ほら、またフォームが崩れたぞ。一喜一憂せずに射るんだ」
鬼頭がふたたび果歩のわき腹や太ももに手をやった。抵抗感が完全に消えたわけではないが、とにかく今は練習に集中することだ。
その後も、一射ごとにフォームをチェックされた。鬼頭は果歩の体に触れながら、その都度、微妙な修正を施してくれた。
そのアドバイスは確実に効果をもたらし、徐々に命中が増えていく。
「ほら、続けろ」
さらに何射か終えたところで、鬼頭の触れる場所が微妙に変化した。わき腹や太ももに添えられた手が少しずつスライドし、右手は脇から胸元へ、左手は太ももから内ももへと移動する。
「えっ、あの……どこを、触って……!?」

さすがに戸惑いを隠せず、たずねる果歩。
「どうした、フォームが乱れていると言っただろう」
だがセクハラともフォーム指導ともつかない微妙なタッチに、それ以上抗弁することができなかった。
それに、さっきから姿勢を直してもらって、上手く的に中り始めたのは事実だ。
今は、顧問教師としての鬼頭を信じて、練習を続けるしかない。レギュラー発表は明日に迫っているのである。
レギュラー当落線上にいる身としては、ここで鬼頭にいいところを見せてアピールする必要があった。
矢を射ることだけに集中し、さらに一射。
「そうだ、今のはよかったぞ……」
ささやきながら、鬼頭が体を押しつけてきた。
果歩は尻の辺りに硬いものが当たっていることに気づく。位置からして腰骨や太ももではないはずだ。
（まさか、これって――）
男性経験のない果歩にも容易に想像がついた。尻の谷間に擦りつけるようにして、

鬼頭が押し当てているのは、おそらく勃起したペニスだろう。
汚らわしい、と思った。
仮に、これが恋しい康平のものであれば、また違った思いを抱けたかもしれない。だが欲望にまみれた下品な中年教師の欲望器官は、袴越しに触れているだけで、体を汚されたような不快感を覚えた。
「なあ、おい……聞いてるのか、椎名」
さらに、生温かい吐息が劣情を孕んで耳たぶに吹きかけられる。全身にぞわりと鳥肌が立った。
もう間違いない。
これはもはや弓道の指導などではない。鬼頭は明確なセクハラの意志を持って、果歩に接している——。
「や、やめてくださいっ……」
果歩は懸命に体をよじり、鬼頭から離れた。
「全国に行きたいんだろう？　俺の『個人指導』を受ければレギュラー間違いなしだぞ？」
タラコ唇の端が笑みの形に吊り上がった。

もちろん、その『個人指導』とやらは弓道のことではあるまい。視線を下ろせば、鬼頭のズボンの股間部は隆々としたテントを張っている。もはや欲望に猛っていることを隠そうともしない。

（康平以外の人とそんなこと、できるわけないわ！）

果歩はキッとした目つきで鬼頭をにらむ。

だが鬼頭はニヤニヤと笑ったまま、平然とその視線を受け止めていた。

「別にエッチさせろなんて言ってないぜ。もちろん、させてくれるんなら喜んでいただくがな。お前はもう篠田と経験済みか？　処女ってことはないよなぁ？」

「失礼なこと聞かないでくださいっ」

無遠慮な鬼頭に、果歩は怒りをあらわにした。

「その様子だと処女みたいだな」

鬼頭のやに下がった目がスッと細まる。

果歩の奥底まで見通すような眼光に、腹の底が冷やりとした。

「まあ、大切なバージンを捧げろとまでは言わないさ。ただちょっとお前の体を触らせてもらったり、俺の体を触ってもらうだけでいい。なんせ『指導』だからな」

「ち、ちょっと触れられるだけでも嫌ですっ。そういう問題じゃないでしょう」

果歩は切れ長の瞳を吊り上げ、怒りの声を上げる。
「強情だな。今どきの女子校生なら大半の奴が経験あるだろう」
「そんなの、人それぞれです。キチンと一線を守っている子だって大勢いますから」
「ははは、見上げた貞操観念だ。いや、学生の鑑だな」
褒められているというより、明らかに嘲弄されているようで不快だった。
「だが、いつまでも嫌だ嫌だと言っていても始まらないぞ。俺の気が変わらないうちに、決断したらどうだ？　俺の気持ち一つで、お前の最後の夏は変わっちまうんだ。それを忘れるなよ」
「っ……！」
果歩は思わず息を呑んだ。
本当は頭の片隅では理解していた。
いくら拒絶しようと、鬼頭はなんの痛痒も感じない。そのときは宣言通り果歩をレギュラーに選ばないだけだろう。
そして、果歩が康平と夢見た最後の夏は残酷な終わりを告げるのだ。
「ちょっとだけだ……ほんの何分か我慢するだけでいい」
鬼頭のささやきが、まるで催眠術のように自分の意識に浸透していくのを感じた。

二人の間に沈黙が流れた。
（他に方法は……ないの？）
苦渋の思いで自問自答した。
正直言って、ほんの少しでも触れたくはない。触れられたくはない。
それが弓道の指導に必要なことならともかく、鬼頭のように明確にセクハラの意志を持って触れられると怖気が走るのだ。
「本当はもう結論が出てるんだろう？　心配するな。今日のことは誰にも言わん。そもそも、こんなことがバレれば俺の教師としての地位も危うくなるんだから言うわけがないだろう。愛しい彼氏に秘密が漏れる心配はない」
（康平……私……私、は……）
次第に果歩の表情がこわばり、全身から力が抜けていく。
一緒に全国大会へ行こうと約束した康平との夢。
その成否は――鬼頭の気持ち一つにかかっているのだ。
「返事はどうした、椎名――いや、果歩」
鬼頭の問いかけに果歩は言葉を返せなかった。
握りしめた拳が、かすかに震え続けていた。

かちゃ、かちゃ、と鬼頭がズボンのベルトを外すのを、果歩は呆然と見つめていた。
（い、一体、何を……!?）
初心な乙女は、肩や腰に少し触れられる程度のことを想像していた。
まさかいきなりズボンを脱ぎ始めるとは完全に想像の範疇を超えていた。
だが鬼頭はおかまいなしにベルトを外しながら、こっちを見てニヤニヤと笑っている。
まるで果歩の狼狽する様を楽しんでいるかのようだ。
自分が何か取り返しのつかない決断をしてしまった気がして、激しい後悔が一気に湧き上がる。
逃げなきゃ――。
そう思っても、両足が床に貼りついたように動かない。
頭の中が真っ白になってしまって、冷静な判断力が完全に失せている。
（どうしよう……どうしよう……）
パニック状態だと自覚すると、ますます思考が混濁した。
私は悪夢でも見ているの？

本当にこれは現実なの？
自問自答している間に、鬼頭はズボンと下着を一緒に下ろし、裸の下半身を剥き出しにした。
果歩は「ひっ」と小さな悲鳴をもらす。
思春期に入ってからは初めて目にする、男の丸出しの下半身だった。
醜く脂肪が乗った中年太りの下腹部。毛むくじゃらの陰毛とだらりと下がった睾丸。そして赤黒い肉茎。
「ほら、どうした？　まずは両手で包みこむんだ」
「うう……」
「せっかくの俺の『指導』を無にする気か？　従わないなら、この話はなかったことにするか、ええ？」
強圧的に告げる鬼頭の言葉が、果歩の理性を麻痺させていく。正常な判断力が曇り、目の前がぼやけていくような錯覚を感じた。
「い、嫌……っ！」
それでも最後の気力を振り絞り、果歩は拒絶の言葉を発する。
「嫌、です……」

震える声は、消え入りそうなほどか細かった。
断れば、レギュラーになれないかもしれない。
恐怖心が増大し、目の前が激しく揺れる。
「彼氏に悪いってか？　そんなに大げさに考えることじゃない」
果歩をなだめるように、鬼頭がこともなげに告げた。
「こんなもの、ただの肉体の一部だろ？　さっきの指導でも俺の手や足が、お前の体に触れたじゃないか。それと大差ない行為だ」
もちろんそんなものは詭弁だ。手足とペニスでは同じ体の一部でも、触れる意味合いがまったく違う。
「……分かり、ました」
だが果歩はその言葉にすがりついた。
すがりつくしかなかった。
（今だけ我慢すればいいのよ。康平との夢を叶えるために――）
自分自身に、必死で言い聞かせる。
眼前でぶらぶらと揺れる汚らしい器官を、少しだけ触り、扱けばいいのだ。それだけで明るい未来が広がる。康平との絆だってもっと深まるに違いない。

「わ、分かりました」
果歩は意を決してうなずいた。その場に跪くと、肉棒からムアッとした生臭い匂いが漂ってきた。むせ返るようなその匂いが生理的な嫌悪感を強烈に呼び覚ます。
果歩はきつく眉を寄せた。
唇を噛みしめて気持ち悪さを無理やり押し殺すと、おずおずと両手を伸ばす。赤黒い男根を両手でそっと包みこんだ。
「きゃあっ……!?」
指先から手のひらにかけて驚くほどの熱を感じ、果歩は反射的に両手を離す。生まれて初めて触れた男性器は、信じられないほどの火照りを宿していた。同じ人間の体の一部とは信じられないほどだ。
(何、これ……!? 男の人の、アレって——こんなに熱くて、硬いの?)
果歩は切れ長の黒瞳を呆然と見開き、鬼頭のシンボル器官を見つめる。先ほどから漂ってくる生臭い牡臭に加え、感触の不気味さで嫌悪感がさらに増した。
「上下に扱くんだ、果歩」
鬼頭が傲岸に命令した。
「っ……!」

馴れ馴れしく名前で呼ばれるのが不快だった。
だが、今は反抗している場合ではない。
とにかく早く終わらせることだった。そう、性的な行為ではなく、単なる作業だと思えばいいのだ――。
果歩は必死で感情を押し殺し、鬼頭のペニスをつかみなおした。硬くてブヨブヨとして気持ちの悪い感触だ。
果歩は悔しさに耐え、太い径を両手で包むようにした。
「こ、こんな感じ……ですか」
務めて事務的な口調でたずねながらも、怒りで頬が赤熱し、悔しさで瞳の端に涙がにじむ。
唇を噛みしめ、両手でつかんだ男根をゆっくり上下に扱き始めた。
「くくく、初々しい手つきじゃないか。篠田にしてやったことはないのか、ええ？」
「あ、あるわけないじゃないですかっ」
果歩は思わず言い返した。
自分と康平はまだ清い関係なのだ。鬼頭の下卑た想像に晒されるだけでも不愉快だった。

「ふん、篠田も情けない奴だな。恋人ならさっさとヤッちまって自分の女にすればいいものを……手をこまねいていると、俺みたいな奴に横からかっさらわれる羽目になる。くくく」
鬼頭は喉を鳴らして笑った。
「ほら、さっさと始めろ」
「言われなくてもっ……」
果歩は険しい表情で悪徳顧問を見据え、それから手元に視線を落とした。
不気味な脈を打ち、ぶよぶよとした柔らかさと鉄のような硬さを併せ持った不思議な器官だった。
果歩はふうっと息を吐き出し、怒りや不安、緊張を振り払った。
ぎこちなく両手を上下に動かし始める。
指先や手のひらに、淫靡な艶を放つ亀頭の丸みや段差の大きな雁、緩やかに反り返った竿の形までがはっきりと伝わってきた。
「くく、ここの段差が大きいと、オマ〇コを擦るときに気持ちがいいんだぜ。お前にもぜひ味わってもらいたいな」
「お断りします」

果歩は冷然と断った。
こんなグロテスクな器官が自分の胎内に入りこむ様を思わず想像してしまい、気持ちが悪くなった。
とにかく、さっさと終わらせてしまえばいいのだ。
果歩は両手の動きをスピードアップさせる。
「お、うう……いいぞ……」
摩擦が増したことで快感も上がったのか、鬼頭が小さくうめいた。
ペニスの頂上部にある小さな穴が開き、そこから尿とは明らかに違うトロトロした液が漏れだしてくる。
ツンと鼻をさす独特の生臭さに、果歩は思わず眉根を寄せた。
流れ出したトロみのある液が亀頭の表面を伝い、指先を濡らす。
「きゃぁっ……」
思わず悲鳴が出てしまった。ヌルリとした感触が気持ち悪かった。強烈な汚辱感で背筋が粟立つ。
「なんだ、カウパーも知らないのか」
鬼頭が馬鹿にするようにせせら笑った。

（かう、ぱー……？　男の人ってこんなのが出てくるの……？）
果歩は戸惑いしきりだ。
今どきの女子校生らしく多少の性知識はある。
だが男性の生理について、熟知にはほど遠かった。
自分が触れているのは未知の器官なのだと、あらためて実感する。
不安と恐怖に似た感情が、果歩の両手の動きを鈍らせた。
今まで以上にぎこちない手コキに、鬼頭が不快げな表情を浮かべる。
「駄目だ駄目だ。そんな程度では男をイカせることはできんぞ。お前の彼氏も満足してくれんだろうなぁ」
嫌みったらしく告げられ、果歩は思わず顔をこわばらせた。
（満足してくれない……？　康平が……？）
「しょうがない、別の方法を教えてやろう。手よりも確実にチンポを気持ちよくするやり方だ。今度こそ俺の指導通りにやるんだぞ、果歩」
「別の方法……？」
嫌な予感を覚えながら、果歩はおうむ返しにつぶやく。
「フェラチオだよ、フェラチオ。お前の年ごろなら、経験はなくても知識くらいある

だろう」
「く、口で……って、それを口で咥えろってことですか⁉　嫌です、絶対に！」
果歩は身を震わせて叫んだ。
眼前では、見るからにグロテスクで、生々しい異臭を放つ器官が揺れ動いている。手で触れるだけでも強烈な嫌悪感と汚辱感があったというのに、この上さらに口に咥えるなど耐え難いことだった。
「まったく、教え甲斐のない奴だな。そんなことではレギュラーは取れんぞ」
鬼頭が呆れたような顔で大仰なため息をついた。暗に『言う通りにしなければ、レギュラーに入れない』と言っているのと同じだ。
（なんて卑怯なの……！）
果歩は怒りと屈辱で言葉も出なかった。だが、決定権はあくまでもこの卑劣な中年教師にあるのだ。果歩にできることは、燃えるような瞳で鬼頭をにらみつけることくらいだった。
「ほら、さっさと跪け。心を込めて奉仕しろよ、果歩」
鬼頭の命令に、頭の中がさらなる怒りで灼熱した。
震えながら、その場に両膝をつく。

こんな男の足元に傅き、屈服の姿勢を取るなど屈辱でしかなかった。
眼前には赤黒い肉塊が先端から欲望の先走りを涎のように垂らしながら、上下に揺れていた。
ツンと鼻を刺す生臭い牡の匂いに、むせそうになる。
匂いだけでも強烈だというのに、これを口の中に咥えるなど正気の沙汰とは思えなかった。
「い、嫌……やっぱり、こんなの駄目です……」
覚悟を決めたはずなのに、どうしても逡巡が消えない。
脳裏にちらつく康平の顔が、罪悪感を何度となく呼び覚ます。
眼前で揺れるグロテスクな肉茎が、本能的な拒絶感を湧き上がらせる。
「ふん、煮え切らない奴だな。俺の方から後押ししないと駄目か？　ええ？　そら、いい加減に観念して咥えろっ」
鬼頭は傲岸に言い放つと、果歩の頭を両手で押さえた。腰を突き出すようにして、怒張したモノを押しつけてくる。
「んんっ、うぅ、むっ⁉」
驚いて口が開いたところで、猛々しい器官が口内に押し入ってきた。

口に咥えてみると、外見以上に太さや逞しさを実感してしまう。その魁偉さに戦くのと同時に、口いっぱいに甘じょっぱい不快な味が広がった。
「うぶ、ぅぅ……っ」
気持ちが悪くてペニスを吐き出してしまった。
「げほっ、ごほっ……」
「おいおい、何やってるんだ？　ちゃんと俺のチンポを咥えろ。先っぽを口にしただけで吐き出すなんて、やっぱりお前には見込みがないか。ん？」
鬼頭が嫌みったらしく告げた。
『見込みがない』という言葉からレギュラーを外される事態を連想した果歩はハッと顔を上げた。
「だ、大丈夫です。その、初めて口にしたので……ちゃんと、やれますっ」
ここまで来たら中途半端に投げ出すのが一番まずい、と肚をくくり、果歩はあらためて眼前の肉棒に向き合った。
フェラチオ初体験の乙女が逡巡する様子を、悪徳教師はご満悦の表情で見下ろしている。
その嘲笑めいた顔が負けん気に火をつけた。

（絶対やり遂げてみせる。レギュラーをつかんで、康平と一緒に全国に行くんだから――）

自分自身を奮い立たせると、果歩はもう一度、赤黒い亀頭に唇をかぶせた。

おそるおそる、今度は吐き出さないように気持ちの悪さを我慢して――。

「んっ、ぐぅ……ぅぅ、ぉ」

二度目だけあって、今度は吐き出さずに先端部を咥えることができた。

だがひどい味であることに変わりはない。

これが鬼頭の味なのか。これが男の味なのか。初めて経験する恥辱的な味わいに、果歩は眉根を寄せてうめく。

「先っぽだけじゃなくて、もっと深く咥えるんだ。そら、手伝ってやるぞ」

鬼頭がいきなり腰を突き出してきた。

「うう、ぐぅぅぅっ⁉　むぐぐぐぅぅぅっ……！」

肉竿の半ばまでを口内に突き入れられて、果歩は目を白黒させた。

生まれて初めて口にした牡の生殖器官は饐えた匂いと生じょっぱい味わいで、最悪の一言に尽きた。

気持ち悪くて、すぐに口の中のペニスを吐き出そうとする。

が、そうはさせじと鬼頭はさらに剛棒を押しこんできた。硬い亀頭部に喉奥を叩かれ、目の前で火花が散る。
「おぉ、ぐ……ふぅ、あぐ……ぅぅっ……」
苦しい。呼吸が詰まり、果歩は可愛らしい小鼻をぴくぴくと膨らませて喘いだ。
「どうだ俺のチンポの味は？　美味いだろう？　女はみんなこれが大好きなんだぞ」
（嘘よ。こんな気持ちの悪いもの、好きになれるはずがないわ）
勝ち誇ったように笑う鬼頭を、果歩は上目遣いににらみつけた。
（私が拒否できないからって調子に乗って……！）
勝ち気な性格を剥き出しに、鋭い眼光を叩きつける。
「……ほう、俺のモノをしゃぶらされても、まったく屈服していない目だな」
鬼頭が嬉しげな顔をした。
口の中で男根がさらに膨張を増し、びくんと跳ねる。
「いいぞ。せいぜい抵抗しろ。それでこそ堕とし甲斐がある。美佳よりもずっと美味しい獲物だよ、お前は」
（美佳……？　え、まさか――）
下級生の藤堂美佳のことを思い浮かべる。

普段から可愛がっている後輩であり、友人であり、レギュラーを争うライバルでもある少女。

まさか――彼女までもが鬼頭の毒牙にかかっているとは考えたくなかった。きっと同じ名前の別人だろう。

「テクニックはともかく、お前の口の中は実に具合がいいな。湯たんぽの中にでも突っこんでるみたいに温かいぜ」

と、果歩の思考を遮るように、鬼頭が腰を揺すり始めた。

口いっぱいに頬張らされた肉茎が、踊るように跳ねる。

「ほら、休まずに口とベロを動かせ。俺を満足させなきゃ、レギュラーには選ばんからな」

「分かりま……むぐ、ちゅぅぅ、した……んんっ」

果歩は暴れるように跳ねるペニスに必死で舌を這わせた。初めてのフェラチオだけに技巧などあったものではない。とにかく懸命に丸みのある先端部を舐め、ごつごつとした竿に舌を絡める。

鬼頭の機嫌を損ねるのはまずい。彼の『指導』に従い、フェラチオを最後までやり遂げるのだ。

「ぐ、ぅぅ、ぉ、んちゅ……ちゅ、ぱぁ……」
果歩は小鼻を膨らませて荒い息をもらしつつ、不気味な男性器官を吸いつけた。
今の自分は一体どんなみっともない顔をしているのだろう、と想像すると、泣きたい気分になってくる。
「くははは、そうだ、頑張って俺に奉仕しろよ、果歩ぉっ！」
一方の鬼頭は勝ち誇った様子で叫んだ。
弓道部一の美少女を屈服させる支配感に酔っているようだ。
果歩が舌をくねらせて撫でるたびに、魁偉なペニスは、びくん、びくん、と強い脈を打った。
鬼頭の快感や欲情が高ぶっている証だろうか。
生まれて初めて触れる、牡の生々しい反応に戸惑いながらも、妖しい気分が込み上げて背筋の辺りをジワジワと粟立たせる。
「そうだ、アイスクリームをしゃぶるような感じで……おお、いいぞ。なかなか呑みこみが早いじゃないか」
鬼頭が声を弾ませて賞賛した。
「清楚な顔して、淫乱の素質があるな」

「なっ……い、淫乱なんて、ひど……おぐぅぅぅ、むぅぅっ⁉」
言いかけたところで、ふたたび鬼頭のシンボル器官が大きく跳ね上がった。雄々しくたくましい肉棒の動きに圧倒される。
口の中が破裂するのではないかと思えるほどの膨張率だ。果歩は肉棒の動きを抑えるように舌を巻きつけ、舌先で丁寧に撫でた。
「くくく、その調子だ。口答えしてないで舌を動かし続けるんだ。俺の指導に従わないと、レギュラーの話は無しだからな」
顧問教師の権限を笠に着て、鬼頭は好き放題に言い放つ。
果歩は従うしかなかった。
どの道、康平以外の男のペニスを手で扱き、口で咥えることまでしてしまったのだ。中途半端に引き返すことはもうできない。
ここでやめてしまったら、レギュラーもつかめず、ただ康平を裏切った事実だけが残ってしまう。
（駄目よ、果歩。なんとしても鬼頭先生に満足してもらって、レギュラーをつかまなきゃ……康平との夢を叶えなきゃ！）
自分自身に何度も言い聞かせ、込み上げる屈辱と嫌悪を必死で押し殺す。

「まったく、男を悦ばせる方法を……ふぉ、ぉぉ……何も、知らないんだな。まあ、いい。それでこそ教え甲斐があるってもんだ……ん、今のは、いいぞ……っ」
鬼頭は時折、喉を鳴らしてうなりつつ、腰を小刻みに震わせる。
おそらく果歩の舌が偶然のようにペニスの性感をまさぐったのだろう。
「んん、ちゅ、れろぉ……んく、ぅ」
鬼頭の反応を探るようにして、ふたたび舌を這わせていく。相手が嫌な中年男だということは意識から追いやり、とにかく目の前の行為に無心で集中することを心掛けた。
そう、ちょうど弓道の競技中のように。
くちゅ、ぴちゃ、と猫がミルクを舐めるときに酷似した音を鳴らしつつ、亀頭の丸みに沿って舌を巻きつけ、鈴口を強く吸う。
「くぉぉ、そ、そうだ……その調子で、なかなか、エロいフェラを……くぅぅっ、身に付けてきたじゃないか……っ！」
鬼頭が快感をあらわに叫び、腰を揺らした。
太い肉刀で口腔を擦られ、口の中がジンと痺れる。
果歩は暴れる男根を抑えこむように口全体を窄めた。

「弓道部のアイドルともあろう果歩が、こんなテクニック……くは、あぁ……いいぞ、もっと絞れ……ぇっ。ん、イイッ！」
半ば反射的な行動が、さらに鬼頭への快感を煽ったようだ。
心地よさそうな叫びとともに、トロリとしたカウパーの量がどんどんと増し、甘じょっぱい味が口いっぱいに広がっていく。
果歩の口の中を占拠している男根も、力強く脈を打ちつつ、魁偉なサイズをさらに膨張させた。
鬼頭の快感が加速度的に高まっている証なのだろう。
「ちゅ、ぅぅ、じゅる……ぅぅぅ」
果歩は両頬を窄め、魁偉なペニスを思いっきり吸い立てた。
とにかく相手に満足してもらうために無我夢中だった。
「ほう、なかなか上達してきたぞ。お前、弓よりもこっちのほうが素質があるな、くくく」
鬼頭はすっかりご満悦の様子だ。
「舌遣いはまだまだが、お前の初々しいフェラ顔を見ていたら催してきたぞ。そろそろ出してやるから、吐き出さずに飲みこめよ、果歩」

（えっ、飲む？　一体、何を――）
鬼頭の言葉の意味が一瞬分からず、果歩の動きが止まる。
次の瞬間、両手で頭を押さえつけられた。動けないように固定された状態で、鬼頭が腰を叩きつけてくる。
まるで口の中を膣に見立てたような激しいフェラチオ。いや、口唇愛撫を強制するこれはイラマチオというべきだろう。
ぐじゅ、ぐちゅっ、と唾液を飛ばしながら、激しい勢いで鬼頭のシンボル器官が果歩の口内を出入りした。
息が詰まって苦しくなるが、頭を押さえつけられているためにペニスを吐き出すこともできない。
しかも鬼頭はそんな果歩の苦悶を楽しむかのように、ますます強烈にピストンを叩きつけてくる。
「くおおお、出るっ！　しっかり受け取れぇっ！」
鬼頭が猛々しく吠えるのと同時に、口いっぱいに頬張らされた男根がさらにワンサイズ膨れ上がった。
どくどくどくっ、と強く脈を打った肉茎から熱いほとばしりが果歩の口内に広がる。

異様にドロドロとして青臭い味をした液体は、津波のようにうねりながら口の中に炸裂した。
舌の上や口蓋の裏にへばりつき、さらに喉奥にまで熱いものが吹きかけられる。
「ぐっ、ごほぉぉぉぉっ……！」
これが男性の射精なのだと今さらながらに気づき、果歩は恥辱感を噛みしめた。
「こぼすな。一滴残らず飲み干すんだ。くくく、俺の指導通りにしろよ、果歩」
鬼頭の言葉に従い、果歩は精液を吐き出さずに、なんとか飲みこもうとする。
甘じょっぱい独特の味を持つスペルマを、涙目になりながら口内から喉へと無理やり流しこんでいく。
（やだ、苦い……汚い……こんなの、飲まされるなんて……）
大量の精液は口蓋や頬の裏にべっとりへばりつき、喉にも絡みついて、なかなか嚥下できない。
気持ち悪い感触がいつまでも口から気道あたりにまで残っていて、とにかく不快の一言に尽きた。
その不快感が鬼頭の前に跪き、奉仕させられた屈辱をさらに強くする。
果歩はその場にへたり込んだまま、立ち上がる気力もなかった。

「約束ですからね。レギュラーの件……」
それでもなんとか暗い気分を押し殺し、鬼頭に念を押す。
力の入らない下肢に無理やり力を入れて、弱々しく立ち上がった。
「おう、任せておけ」
鬼頭はニヤニヤと笑いながら、果歩を抱きすくめた。避けようにも体がふらついて、どうしようもなかった。
生臭い息を吹きかけられて、思わず顔をしかめる。
と、いきなり顎を上向けられると、鬼頭の顔が近づいてきた。果歩の清らかな唇を奪おうと、タラコ唇を突き出してくる。
「やめてくださいっ」
果歩は必死で両腕を突っ張り、暴虐なキスから間一髪で逃れた。
心臓が早鐘を打つ。
もう少しで康平以外の男とキスをしてしまうところだった。
「なんだ、キスくらいでケチケチするな。さっきまで仲良くやってただろ」
「キスくらいって――」
果歩は怒りに肩を震わせた。

確かに、やむを得ず中年男の肉棒に手コキやフェラを施した。だが、唇を許すというのはそれとは根本的に意味合いが違う。
果歩にとってキスというのは、本当に好き合った相手とだけ交わす特別で神聖な行為なのだ。
今までの人生で、それを許したのは恋しい康平だけだ。
間違っても、こんな卑劣で下劣な男に許すべき行為ではない。
「……ふん、まあいい。いずれお前の方からねだってくるようになるさ」
「おかしなことを言わないでください」
果歩は真っ向から鬼頭を見据える。
悪徳教師は揺らぎもせずに、その視線を受け止めていた。
自身に満ちあふれた表情が、果歩の不安をかすかに煽った。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/